

令和 6 (2024) 年度マチ類 (奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島) の 資源評価

水産研究・教育機構

水産資源研究所 水産資源研究センター (増淵隆仁・五味伸太郎・酒井 猛・
井関智明)

参画機関：鹿児島県水産技術開発センター、沖縄県水産海洋技術センター

要 約

マチ類主要 4 種 (アオダイ、ハマダイ、ヒメダイ、オオヒメ) の本系群の資源状態について、鹿児島市中央卸売市場における水揚げ量および八重山漁協所属船の 1 隻 1 航海あたりの漁獲量 (CPUE) の変動傾向により評価した。マチ類の漁獲量は、1960 年代から 1980 年代にかけて高い水準で推移したが、その後急激に減少した。2000 年代以降の CPUE は、増減を繰り返しながら低い水準で推移している。資源水準の判断には、1960~2023 年における 64 年分の漁獲統計がある鹿児島市中央卸売市場のデータを用いた。アオダイ、ハマダイおよびヒメダイとオオヒメの混合種群について解析した結果、いずれの種・種群においても 1990 年代以降の漁獲はそれ以前の漁獲量と比較して少なく、資源水準を低位と判断した。資源動向の判断には、八重山漁協所属船の CPUE を用い、アオダイについては資源動向を横ばい、ハマダイについては増加、メダイ、オオヒメについては減少と判断した。

マチ類では漁獲統計、生物情報において十分なデータが整備されていないため、漁獲量と八重山漁協所属船の CPUE を基に、その水準および変動傾向に合わせた漁獲を行うことを管理方策として、2025 年の ABC を算定した。なお、本報告書における ABC は漁業法改正前の考え方に基づく基本規則 2-1) を適用した値である。

第 1 期資源回復計画で周年禁漁であった保護区が 2010 年 4 月に一部または全面解禁となったことより、ハマダイにおいて集中漁獲がみられた。保護区内での 1 操業あたりの漁獲量制限を設ける等、解禁した保護区での資源管理方策を策定することが望ましい。

	管理基準	Target/ Limit	2025年ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F値
アオダイ	0.7・Cave 3-yr・0.98	Target	111	—	—
		Limit	139	—	—
ハマダイ	0.7・Cave 3-yr・1.05	Target	146	—	—
		Limit	183	—	—
ヒメダイ	0.7・Cave 3-yr・0.93	Target	36	—	—
		Limit	45	—	—
オオヒメ	0.7・Cave 3-yr・0.88	Target	31	—	—
		Limit	39	—	—

Limit は、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量である。Target は、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の維持が期待される漁獲量である。ABCtarget = α ABClimit とし、係数 α には標準値 0.8 を用いた。Cave 3-yr は 2021～2023 年の漁獲量の平均値である。

	年	資源量 (トン)	親魚量 (トン)	漁獲量 (トン)	F値	漁獲割合 (%)
アオダイ	2019	—	—	320	—	—
	2020	—	—	295	—	—
	2021	—	—	211	—	—
	2022	—	—	219	—	—
	2023	—	—	177	—	—
ハマダイ	2019	—	—	248	—	—
	2020	—	—	255	—	—
	2021	—	—	215	—	—
	2022	—	—	238	—	—
	2023	—	—	290	—	—
ヒメダイ	2019	—	—	103	—	—
	2020	—	—	112	—	—
	2021	—	—	75	—	—
	2022	—	—	72	—	—
	2023	—	—	59	—	—
オオヒメ	2019	—	—	80	—	—
	2020	—	—	64	—	—
	2021	—	—	54	—	—
	2022	—	—	73	—	—
	2023	—	—	64	—	—

魚種	水準	動向
アオダイ	低位	横ばい
ハマダイ	低位	増加
ヒメダイ	低位*	減少
オオヒメ		減少

*1989年まで2種が区別されていなかったため、本報告では両種を混合種群として扱った。

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報、関係調査等
漁獲量	主要港水揚げ量(鹿児島県、沖縄県)
資源量指標値・CPUE	八重山漁協所属船の漁獲量・のべ水揚げ隻数(周年、沖縄県)
尾叉長組成	生物情報収集調査(鹿児島県、沖縄県)

1. まえがき

奄美・沖縄・先島諸島海域に分布するマチ類主要4種(アオダイ、ハマダイ、ヒメダイ、オオヒメ)の漁獲量は、1960年代～1980年代に高い水準であったが、その後著しく減少し、2000年代以降は低い水準で推移している。水産庁は平成15(2003)年度にこれら4魚種を資源回復計画対象種に指定し、資源動向を的確に把握することを目的として平成16(2004)年度から資源評価調査を開始した。平成17(2005)年度には第1期資源回復計画が公表され、鹿児島県では同年4月から5年間、16の保護区で周年または季節的な禁漁、沖縄県では同年10月～平成21(2009)年度3月まで、北大九曾根と沖の中の曾根の2つの保護区で周年禁漁となった。平成22(2010)年度より第2期マチ類資源回復計画が開始され、鹿児島県で17区、沖縄県で5区の周年または季節的な禁漁措置が実施されると共に、小型魚保護の目的で漁獲体長規制が実施されている。平成24(2012)年度より、新たな枠組みである南西諸島海域マチ類広域資源管理方針が作成され、新規保護区の設定、小型魚の漁獲制限などが導入された。平成26(2014)年度には、鹿児島県において新たに2保護区が追加された。令和6(2024)年度現在も、鹿児島県で19区(周年保護3区、期間保護16区)、沖縄県で5区(周年保護1区、期間保護4区)の計24区の保護区と小型魚の漁獲制限など、資源管理への取り組みが継続されている。

2. 生態

(1) 分布・回遊

マチ類は熱帯～温帯海域に広く分布し、日本近海ではアオダイ、ハマダイ、ヒメダイ、オオヒメのいずれも伊豆諸島および紀伊半島以南に分布する(図1)。アオダイは日本近海および周辺海域からの記録しかないが、他の3種はハワイ諸島～東アフリカに広く分布する(Allen 1985)。

生息水深は4種間で異なり、アオダイは水深80～300mに生息し、主に100～250mで漁獲される(佐多1988)。ハマダイは生息水深が110～500mと最も深く、主に200～380mで漁獲される。ヒメダイは100～400mに生息し、100～300mで多く漁獲される。オオヒメは70～350mに生息し、100～300mで多く漁獲される。

回遊・移動に関して、これまでに得られている情報は限定的である。鹿児島県水産技術

開発センターが 2005 年より標識放流調査を実施し、2022 年までにアオダイ 1,581 個体、ハマダイ 192 個体、ヒメダイ 64 個体、オオヒメ 79 個体を放流した。2022 年までの再捕は、アオダイ 12 個体、ヒメダイ 1 個体、オオヒメ 3 個体であるが、このうちアオダイ 3 個体とオオヒメ 2 個体は、放流した曾根よりそれぞれ 38.8 km、40 km、150 km および 86 km、93 km 離れた別の曾根で再捕され、曾根間を移動している可能性が示唆された(図 2、榊ほか 2023)。沖縄県水産海洋技術センターは、2006～2017 年に北大九曾根および第二多良間堆での試験操業において、アオダイ 8 個体、ハマダイ 121 個体、ヒメダイ 42 個体、オオヒメ 43 個体を放流した。2012 年 3 月末までにオオヒメ 2 個体が、それぞれ 2.37 年後と 3.28 年後に、いずれも放流地点から 5.3 km 離れた場所で再捕された(Uehara et al. 2019)。生息水深の深いハマダイでは、標識放流後の生残が不明であったが、2016 年に屋久島海域において実施した超音波テレメトリーを使った調査により、ハマダイが標識放流後も生存していることが分かった(Okuyama et al. 2019)。

(2) 年齢・成長

マチ類 4 種の成長と寿命は、沖縄海域から得られた漁獲物の耳石切片を用いた年齢査定により明らかにされている(Uehara et al. 2020)。また、ハマダイでは日齢査定も成長率の推定に利用されている(Uehara et al. 2020)。

耳石輪紋解析の結果、アオダイの最高齢は雌で 53 歳、雄で 59 歳と推定され、Bertalanffy の成長式は雌雄別に次式で与えられた(図 3)。

$$\text{雌} : FL_t = 46.3(1 - \exp(-0.133(t + 3.332)))$$

$$\text{雄} : FL_t = 44.6(1 - \exp(-0.134(t + 3.648))) \quad (t \text{ は年齢, } FL_t \text{ は } t \text{ 歳時の尾叉長 cm})$$

耳石輪紋解析の結果、ハマダイの最高齢は雌で 54 歳、雄で 55 歳と推定され、Bertalanffy の成長式は雌雄別に次式で与えられた(図 4)。

$$\text{雌} : FL_t = 86.2(1 - \exp(-0.122(t + 0.848)))$$

$$\text{雄} : FL_t = 79.2(1 - \exp(-0.140(t + 0.723)))$$

耳石輪紋解析の結果、ヒメダイの最高齢は雌で 38 歳、雄で 35 歳と推定され、Bertalanffy の成長式は雌雄別に次式で与えられた(図 5)。

$$\text{雌} : FL_t = 42.5(1 - \exp(-0.115(t + 4.553)))$$

$$\text{雄} : FL_t = 51.7(1 - \exp(-0.035(t + 16.281)))$$

耳石輪紋解析の結果、オオヒメの最高齢は雌で 34 歳、雄で 35 歳と推定され、Bertalanffy の成長式は雌雄別に次式で与えられた(図 6)。

$$\text{雌} : FL_t = 70.4(1 - \exp(-0.080(t + 5.217)))$$

$$\text{雄} : FL_t = 70.8(1 - \exp(-0.072(t + 5.612)))$$

(3) 成熟・産卵

マチ類はいずれの種も産卵期間中に複数回産卵すると考えられており、ハマダイとオオヒメでは、月齢による産卵頻度の変化が示唆されている(Uehara et al. 2018)。各種の尾叉長と成熟率の関係(図 7) および産卵期は沖縄海域で推定されている(Uehara et al. 2018)。各種の成熟尾叉長時の年齢は、前述の雌の成長式(Uehara et al. 2020)を用いて変換した。

アオダイ雌の最小成熟尾叉長と 50%成熟尾叉長はそれぞれ、24.7 cm (2 歳)、34.8 cm (7

歳)、産卵期は4~9月である。

ハマダイ雌の最小成熟尾叉長と50%成熟尾叉長はそれぞれ、61.2 cm (9歳)、67.1 cm (12歳)、産卵期は5~11月である。

ヒメダイ雌の最小成熟尾叉長と50%成熟尾叉長はそれぞれ、23.7 cm (2歳)、24.6 cm (2歳)、産卵期は3~10月である。

オオヒメ雌の最小成熟尾叉長と50%成熟尾叉長はそれぞれ、33.1 cm (2歳)、35.7 cm (3歳)、産卵期は3~10月である。

(4) 被捕食関係

アオダイは、大型の動物プランクトン(ヒカリボヤ類、クダクラゲ類、サルパ類、オタマボヤ類、クラゲノミ類、甲殻類の幼生)を捕食する(東京都水産試験場 1974)。ハマダイは、小型イカ類、魚類などの近底層性小型遊泳生物を捕食している(小菅 未発表資料)。ヒメダイの胃内容物としては、魚類、ヒカリボヤ類、浮遊性甲殻類、イカ類、多毛類が記録されている(Kami 1973)。オオヒメも魚類、ヒカリボヤ類、浮遊性甲殻類、イカ類などの、中層に浮遊、あるいは遊泳している生物を捕食している(Kami 1973)。

捕食者については、マハタの胃からハマダイが、カンパチの胃からアオダイが出現した記録がある(小枝・本村 2017)。また、釣獲したマチ類を海面に引き揚げるまでの間にサメ類によって食害される被害が漁業上の問題として指摘されている。

3. 漁業の状況

(1) 漁業の概要

マチ類は、鹿児島県・沖縄県いずれにおいても水深100 m以深で操業する深海一本釣り漁業や底立はえ縄漁業によって漁獲される。周年操業する一本釣り専業者が主体であるが、時期に応じてソデイカ漁などの他漁業と兼業する漁業者もいる。また、一本釣りでも操業形態や1航海あたりの操業日数に違いがあり、奄美群島や熊毛地区では日帰り操業が多いのに対し、沖縄諸島や八重山諸島では、5トン未満の小型船で日帰りまたは2~3日、5トン以上の船で1週間程度の操業が主体である。

(2) 漁獲量の推移

長期的なマチ類の水揚げ量の記録は、鹿児島市中央卸売市場で1960年以降、沖縄県で1965年以降(主要4種以外も含む)に存在する。マチ類全体の漁獲量は、いずれの県においても1960年代~1980年代に高い水準であったが、1980年代後半から1990年代にかけて急激に減少した(表1、2)。鹿児島市中央卸売市場では、1988年までの水揚げ量はおよそ600~1,100トンで推移していたが、1989年以降に急激な減少に転じた(図8、表1)。2000年以降も緩やかな減少傾向が続き、2023年の水揚げ量は161トンで、最大値(1,145トン)を記録した1969年のおよそ14%であった。内閣府沖縄総合事務局が集計した沖縄農林水産統計年報によれば、沖縄県に水揚げされるマチ類全体の漁獲量は、1980年の2,308トンを最大として、1979~1982年に2,000トンを超える漁獲を記録した(表2)。その後の漁獲量は、1983~1989年には1,065~1,564トン、1990~2006年には212~977トンとなり、40年間で大幅に減少した。1990年代の漁獲量の大幅な減少は、漁場探索技術の革新によつ

て効率的な漁場探索ができるようになったため、過剰な漁獲圧がかかったことが一因として考えられる。なお、マチ類の主漁法である一本釣り漁業の沖縄県における経営体数は、1974～2001年に1,097～1,655経営体あったものが、2002年以降に800前後に減少している。2007年以降、沖縄農林水産統計年報におけるマチ類全体漁獲量の集計が廃止となった一方、1989年以降沖縄県によりマチ類4種の水揚げ量が継続的に収集されている。なお、表2におけるマチ類全体の漁獲量は属人統計であり、主要4種の漁獲量は属地統計によるものである。

アオダイとハマダイの海域全体の漁獲統計は、1999年以降に鹿児島県・沖縄県で整備されたものが利用可能である。アオダイの漁獲量は、1999年の609トンを最大に、以降減少傾向が続いており、2023年は177トンであった(図9、表3)。県別にみると、鹿児島県では2000年の260トンから2008年の136トンまで減少し、2023年は過去最低値となる108トンであった。沖縄県では、1995年の433トンを最大に減少傾向で、2023年は69トンであった(表2)。

ハマダイの漁獲量は1999年以降2003年まで漸減し140トンを下回ったが、2006年以降は増加に転じ、2023年は290トンであった(図10、表3)。県別にみると、鹿児島県では、1999年の127トンから2005年の64トンまで減少したが、その後増加傾向となって2023年は145トンであった。沖縄県では、1996年の215トンを最大に減少し、2003年に最低値である66トンを記録したが、その後増加傾向に転じ、2023年は144トンであった。

鹿児島県の主要漁港における漁獲統計は1999年に整備されたが、2007年以前には奄美地域ではヒメダイとオオヒメが区別されていなかったため、マチ類4種の海域全体の漁獲統計を扱えるようになったのは2008年以降である(表3)。なお、鹿児島県の喜界島漁協だけは、2024年現在までヒメダイとオオヒメが区別されていないが、漁獲量が年1トン未満しかないので、ここでは集計から除外した。ヒメダイの漁獲量は、2008年以降減少しており、2023年は59トンであった(図11、表3)。県別にみると、鹿児島県では、2008年以降2023年まで、増減を繰り返しながら20～58トンで推移している。沖縄県では、1989年の300トンを最大に、以降減少傾向が続いており、2023年は28トンであった。

オオヒメの漁獲量は、2008年以降2023年まで、短期的な増減を繰り返しながら42～90トンで推移している(図12、表3)。県別にみると、鹿児島県では、2008年以降2023年まで、短期的な増減を繰り返しながら12～34トンで推移している。沖縄県では、1989年の93トンから2013年の25トンまで漸減し、2014年には61トンに増加したが、その後再び減少して2023年は32トンであった。

なお本報告で扱った魚種別漁獲量の推移については、鹿児島県・沖縄県の主要漁港の漁獲データが全て整備され、海域全体でのデータ収集が可能となった1999年以降の変動を扱っており、1980年以前と比べてマチ類の総漁獲量が半分以下に落ち込んだ後の期間における変動であることに留意する必要がある。

(3) 漁獲努力量

資源量指標値の算出に使用している八重山漁協所属船が、1989年以降にマチ類各種を水揚げした年間ののべ航海数を漁獲努力量として記す(表4)。アオダイでは、1996年の1,465航海を最多に減少傾向であり、2004～2012年には500航海前後、2013年以降は300航海

前後で推移している。ハマダイでは、1996年の2,407航海を最多に減少傾向であり、2013年以降は1,000~1,400航海前後で推移している。ヒメダイでは、1996年の1,215航海を最多に減少傾向であり、2013年以降は500航海前後で推移している。オオヒメでは、2009年まで300~500航海前後で増減を繰り返していたが、2010年以降は200航海前後で推移している。

4. 資源の状態

(1) 資源評価の方法

資源水準の判断には、1960~2023年における64年間のマチ類4種の漁獲統計がある鹿児島市中央卸売市場のデータを用いた(補足資料1)。なお、鹿児島市中央卸売市場では1989年までヒメダイとオオヒメが区別されていなかったため、本報告では両種を混合種群として扱った。水準の判断には、アオダイ、ハマダイおよびヒメダイ・オオヒメの混合種群それぞれの漁獲量の最高値と最低値の間を3等分した値を高位・中位・低位の区切りとした(図8)。

資源動向の判断には、1989~2023年における35年間のデータがある沖縄県八重山漁協所属一本釣り漁船のデータを用いた。八重山漁協所属一本釣り漁船は、漁場が近いために1回あたりの操業日数が長期間にわたって安定しており、資源量指標値の算出に適している。海老沢ほか(2008)の方法に従い、1隻1航海あたりの漁獲量(CPUE)を年毎に求め、これを資源量指標値とした(表4)。それぞれの種の資源動向は、直近5年間(2019~2023年)の資源量指標値の推移から判断した。なおこの期間は、1980年以前と比べてマチ類の総漁獲量が半分以下に落ち込んだ後であり、資源水準の判断には用いなかった。

(2) 資源量指標値の推移

アオダイの資源量指標値は、2011年まで概ね横ばいで推移していたが、以降2016年まで減少した。2017年には一時増加したが、その後は概ね横ばいで推移している(図13)。

ハマダイの資源量指標値は、1992年から2003年にかけて減少傾向にあったが、その後増加に転じた。2007年以降は短期的な増減を繰り返しているが、2018年以降はわずかに増加傾向である(図14)。

ヒメダイの資源量指標値は、1989年から2005年にかけて減少傾向にあったが、その後2011年にかけて増加し、その後2013年まで再び減少した。それ以降は短期的な増減がみられ、2019年以降は緩やかな減少傾向である(図15)。

オオヒメの資源量指標値は、これまで漸減・漸増を繰り返していたが、2023年は大きく減少している。(図16)。

(3) 漁獲物の年齢(体長)組成

2004~2023年に鹿児島県(主に種子島沖、屋久島沖、奄美大島沖、沖永良部島沖)および沖縄県(主に宝山・大九曽根、八重山諸島沖、大陸棚斜面)で漁獲、水揚げされたマチ類の尾叉長組成を年毎に作成し、尾叉長と成熟率の関係から漁獲物に占める成熟個体数の割合を算出した。

アオダイの尾叉長組成は、28~34 cmに最頻値を持つ単峰型で、資源回復計画に伴う漁

獲体長規制（20 cm 未満）が導入された 2010 年 4 月以降、小型魚の水揚げが減少した（図 17）。成熟個体数の割合は、2004～2006 年には 10～20%前後であったが、2007 年以降は 30%前後に増加し、2015～2023 年には 37～50%に増加した。

ハマダイの尾叉長組成は、29～40 cm に最頻値を持つ単峰または二峰型で、資源回復計画に伴う漁獲体長規制（30 cm 未満）が導入された 2010 年 4 月以降、小型魚の水揚げが減少した（図 18）。他魚種と比べて漁獲尾叉長範囲が広く、かつ漁獲物中の成熟個体数の割合が毎年 0.5～3.1%と著しく低い。

ヒメダイの尾叉長組成は、27～31 cm に最頻値を持つ単峰型で、資源回復計画に伴う漁獲体長規制（20 cm 未満）が導入された 2010 年 4 月以降、小型魚の水揚げが減少したが、2017 年には一時的に小型魚の水揚げが増加した（図 19）。成熟個体数の割合は、2004～2010 年には 67～73%であったが、2011 年以降は 74～80%に増加した。

オオヒメの尾叉長組成は、36～44 cm に最頻値を持つ単峰または多峰型で、資源回復計画に伴う漁獲体長規制（20 cm 未満）が導入された 2010 年 4 月以降、小型魚の水揚げが減少した（図 20）。成熟個体数の割合は、2004～2010 年には 56～78%であったが、2011 年以降は 58～89%に増加した。

(4) 資源の水準・動向

資源水準は、鹿児島市中央卸売市場における過去 64 年間（1960～2023 年）の漁獲統計から、アオダイ、ハマダイ、ヒメダイ・オオヒメ混合種群のいずれも低位と判断した（図 8）。

資源動向は、直近 5 年間（2019～2023 年）の資源量指標値の推移から、アオダイを横ばい、ハマダイを増加、ヒメダイ、オオヒメを減少と判断した（図 13、14、15、16）。

5. 2025 年 ABC の算定

(1) 資源評価のまとめ

資源水準は、鹿児島市中央卸売市場における過去 64 年（1960～2023 年）の年間水揚げ量から、アオダイ、ハマダイ、ヒメダイ・オオヒメ混合種群のいずれも低位であった。資源動向は、近年（2018～2023 年）の八重山漁協所属船の CPUE を資源量指標値として用いて判断した結果、アオダイは横ばい、ハマダイは増加、ヒメダイ、オオヒメは減少であった。

第 1 期および第 2 期資源回復計画、その後の広域資源管理方針により周年または期間保護区を設置した結果、資源の減少に歯止めがかかりつつあるが、資源の増加にはつながっていない。今後、漁獲体長規制の強化や保護区解禁後の漁場利用のあり方など、新たな方策が必要であろう。

(2) ABC の算定

マチ類は十分な漁獲統計、生物情報データが整備されていないため、漁獲量と資源量指標値の推移を根拠に、その水準および変動傾向に合わせた漁獲を行うことを管理方策として、2025 年 ABC を算定した。本報告書における ABC は漁業法改正前の考え方に基づく基本規則 2-1)（水産庁・水産機構 2024）を適用した値である。

$$ABClimit = \delta_1 \times Cave\ 3\text{-yr} \times \gamma_1$$

$$ABCtarget = ABClimit \times \alpha$$

$$\gamma_1 = (1+k(b/I))$$

ここで、Cave 3-yr は 2021～2023 年の平均漁獲量（アオダイ 202 トン、ハマダイ 247 トン、ヒメダイ 68 トン、オオヒメ 64 トン）、 δ_1 は基本規則において Cave を用いる時の低位水準の推奨値である 0.7 とした。k は基本規則 2-1) における標準値 1.0、b は 2021～2023 年の資源量指標値の傾き（アオダイ -0.24、ハマダイ 1.90、ヒメダイ -0.61、オオヒメ -1.29）、I は 2021～2023 年の資源量指標値の平均値（アオダイ 13.24 kg/航海、ハマダイ 34.81 kg/航海、ヒメダイ 9.04 kg/航海、オオヒメ 10.94 kg/航海）を用いた。

	管理基準	Target/ Limit	2025 年 ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F 値
アオダイ	0.7・Cave 3-yr・0.98	Target	111	—	—
		Limit	139	—	—
ハマダイ	0.7・Cave 3-yr・1.05	Target	146	—	—
		Limit	183	—	—
ヒメダイ	0.7・Cave 3-yr・0.93	Target	36	—	—
		Limit	45	—	—
オオヒメ	0.7・Cave 3-yr・0.88	Target	31	—	—
		Limit	39	—	—

Limit は、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量である。Target は、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、より安定的な資源の維持が期待される漁獲量である。ABCtarget = α ABClimit とし、係数 α には標準値 0.8 を用いた。Cave3-yr は 2021～2023 年平均漁獲量を用いた。

(3) ABC の再評価

昨年度評価以降追加されたデータセット	修正・更新された数値
なし	なし

	評価対象年 (当初・再評価)	管理基準	F 値	資源量 (トン)	ABC Limit (トン)	ABC Target (トン)	漁獲量 (トン)
アオダイ	2023 年(当初)	0.7・Cave 3-yr・0.94	—	—	181	145	
	2023 年(2023 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・0.94	—	—	181	145	
	2023 年(2024 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・0.94	—	—	181	145	177
	2024 年(当初)	0.7・Cave 3-yr・1.07	—	—	181	145	
	2024 年(2024 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・1.07	—	—	181	145	
ハマダイ	2023 年(当初)	0.7・Cave 3-yr・0.96	—	—	161	129	
	2023 年(2023 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・0.96	—	—	161	129	
	2023 年(2024 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・0.96	—	—	161	129	290
	2024 年(当初)	0.7・Cave 3-yr・1.08	—	—	178	142	
	2024 年(2024 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・1.08	—	—	178	142	
ヒメダイ	2023 年(当初)	0.7・Cave 3-yr・0.85	—	—	60	48	
	2023 年(2023 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・0.85	—	—	58	46	
	2023 年(2024 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・0.85	—	—	58	46	59
	2024 年(当初)	0.7・Cave 3-yr・1.01	—	—	61	49	
	2024 年(2024 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・1.01	—	—	61	49	
オオヒメ	2023 年(当初)	0.7・Cave 3-yr・0.94	—	—	44	35	
	2023 年(2023 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・0.94	—	—	44	35	
	2023 年(2024 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・0.94	—	—	44	35	64
	2024 年(当初)	0.7・Cave 3-yr・1.00	—	—	45	36	
	2024 年(2024 年再評価)	0.7・Cave 3-yr・1.00	—	—	45	36	

6. その他の管理方策の提言

1980 年代以降にマチ類全体の漁獲量が急激に減少したことから、2005 年に第 1 期資源回復計画が公表され、5 年間の期限付きながら 18 の保護区が設置された。2010 年より第 2 期資源回復計画が開始され、周年または季節的な保護区を、鹿児島県で 17 区、沖縄県で 5 区に増やした。2012 年からは広域資源管理方針となって、2023 年現在では、鹿児島県で 19 区（周年保護 3 区、期間保護 16 区）、沖縄県で 5 区（周年保護 1 区、期間保護 4 区）の計 24 区の保護区が設置されている。これらの結果、漁獲物の平均尾叉長上昇や大型個体の増加が確認されるなど(榊ほか 2023)、一定の効果が現れはじめていると考えられるものの、海域全体の資源増加には至っていない。

2010 年の第 2 期資源回復計画の開始に伴い、保護区設置に加え漁獲体長規制などによる小型魚保護も導入され、海域全体における小型魚への漁獲圧削減措置が実施されている。マチ類は一般に成長が遅く長寿命であり、成熟までに 9 年以上を要する魚種（ハマダイ）があるなど、長期的な視点での管理措置の実施が必要である。

第 1 期資源回復計画で周年禁漁であった保護区が 2010 年 4 月に一部解禁、または全面解禁となったことにより、特にハマダイにおいて集中漁獲がみられた。そのため、解禁さ

れた保護区での集中漁獲を避けるため、解禁時の保護区内への入域制限や1操業あたりの漁獲量制限を設ける等、保護区が一時的な管理方策にならないよう継続的な措置を講じていくことが望ましい。今後は従来の管理方策に加え、解禁した保護区での資源管理方策を策定することが検討されている。

7. 引用文献

- Allen, G. R. (1985) FAO species catalogue, Vol. 6. Snappers of the world. An annotated and illustrated catalogue of lutjanid species known to date. FAO Fisheries Synopsis No. 125, Vol. 6, 208 pp.
- 海老沢明彦・平手康市・山田真之 (2008) 沖縄県水産海洋研究センター漁獲統計データベースを基に推定したアオダイ、ヒメダイおよびハマダイの種別1航海当たり漁獲量の年変化. 平成19年度沖縄県水産海洋研究センター事業報告書, **69**, 104-106.
- Kami, H. T. (1973) The *Pristipomoides* (Pisces: Lutjanidae) of Guam with notes on their biology. *Micronesica*, **9**, 97-118.
- 小枝圭太・本村浩之 (2017) 鹿児島大学総合研究博物館に所蔵されている胃内容物魚類標本. *Nature of Kagoshima* **43**, 257-269.
- Okuyama, J., H. Shishidou and T. Hayashibara (2019) Post-release horizontal and vertical behavior and philopatry of deepwater longtail red snapper *Etelis coruscans* around a bank. *Fish. Sci.*, **85**, 361-368.
- 榊純一郎・漁業調査船くろしお (2023) 200カイリ水域内漁業資源総合調査事業-III (マチ類). 令和3年度鹿児島県水産技術開発センター事業報告書.
- 佐多忠夫 (1988) マチ類. 「サンゴ礁域の増養殖」諸喜田茂充編著, 緑書房, 東京, 144-151.
- 東京都水産試験場 (1974) 昭和48年度指定調査研究総合助成事業、底魚資源調査研究報告書 (アオダイ). 東水試出版物通刊 No. 244, 調査研究要報, No. 108, 1-16.
- 水産庁, 水産研究・教育機構 (2024) 令和6(2024)年度ABC算定のための基本規則. FRA-SA2024-ABCWG02-02, 水産研究・教育機構, 横浜, 11pp, https://abchan.fra.go.jp/references_list/FRA-SA2024-ABCWG02-02.pdf
- Uehara, M., A. Ebisawa and I. Ohta (2018) Reproductive traits of deep-sea snappers (Lutjanidae): Implication for Okinawan bottomfish fisheries management. *Reg. Stud. Mar. Sci.*, **17**, 112-126.
- Uehara, M., A. Ebisawa and I. Ohta (2020) Comparative age-specific demography of four commercially important deep-water snappers: implication for fishery management of a long-lived lutjanid. *J. Fish Biol.*, **97**, 121-136.
- Uehara, M., A. Ebisawa, I. Ohta and Y. Aonuma (2019) Effectiveness of deepwater marine protected areas: Implication for Okinawan demersal fisheries management. *Fish. Res.*, **215**, 123-130.

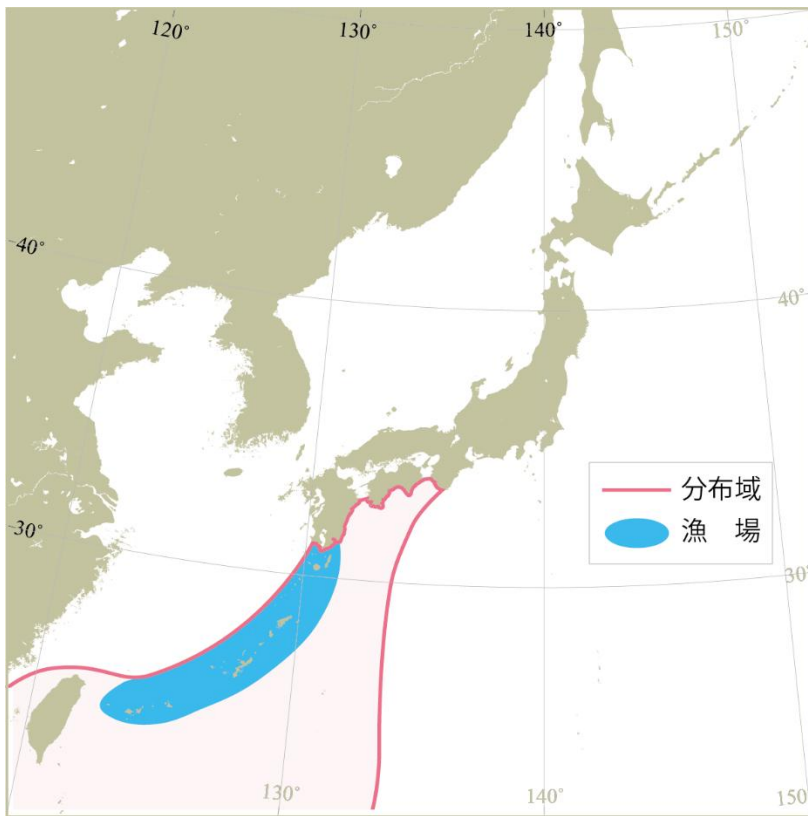


図1. マチ類の分布域と漁場

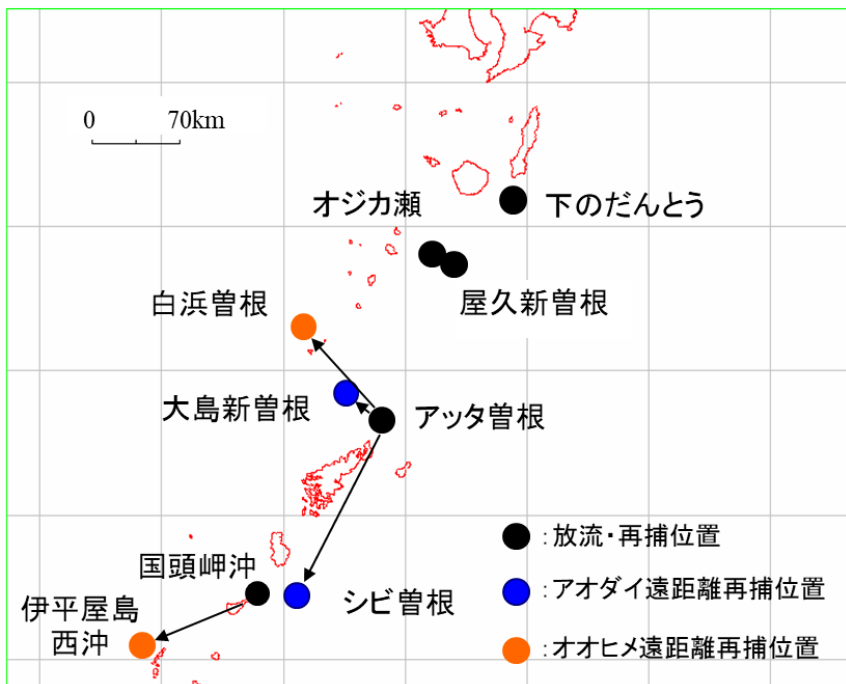


図2. 鹿児島海域での標識放流および再捕地点

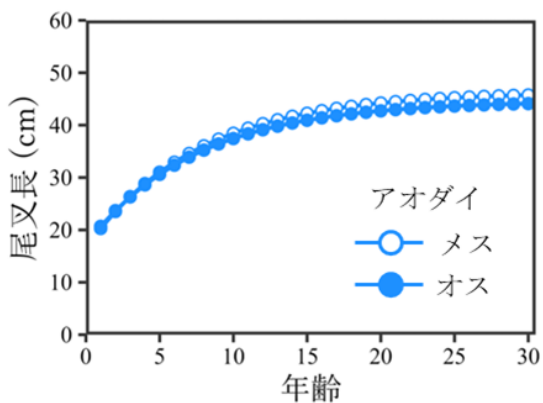


図3. アオダイの成長曲線

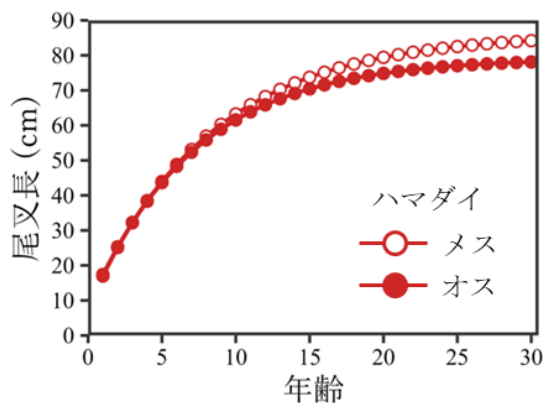


図4. ハマダイの成長曲線

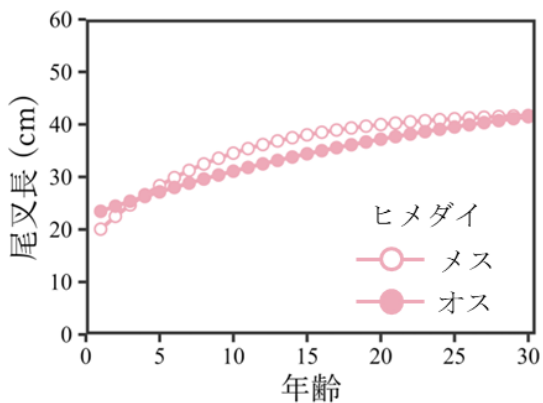


図5. ヒメダイの成長曲線

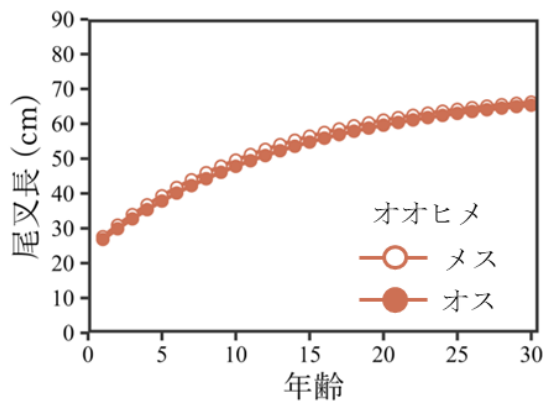


図6. オオヒメの成長曲線

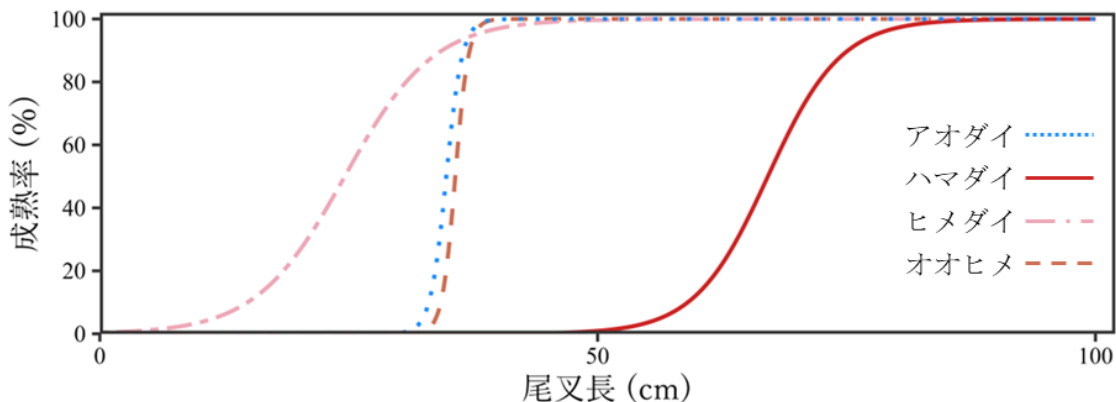


図7. マチ類4種の尾叉長と雌の成熟率の関係

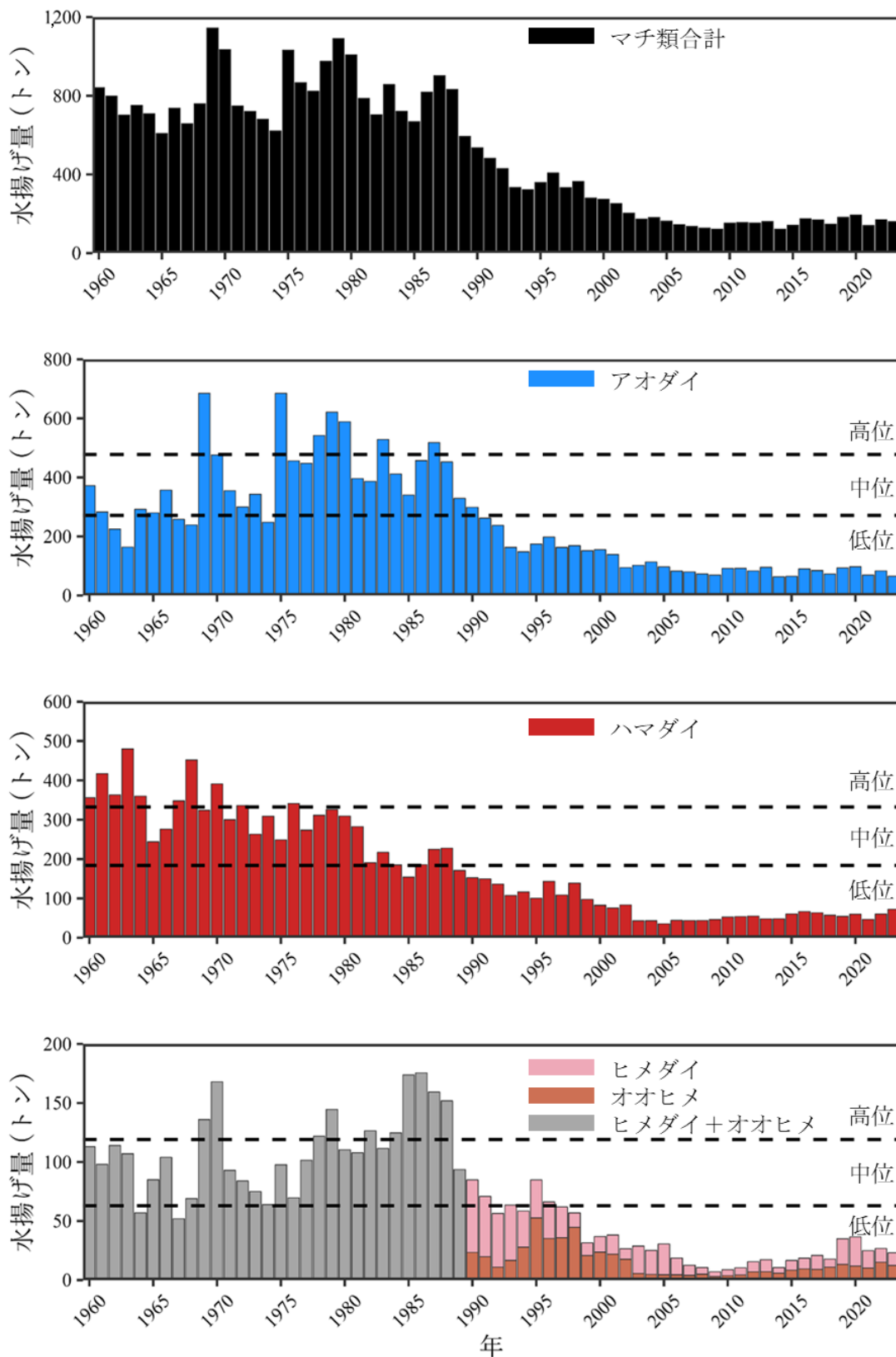


図8. 鹿児島市中央卸売市場におけるマチ類4種水揚げ量の経年変化

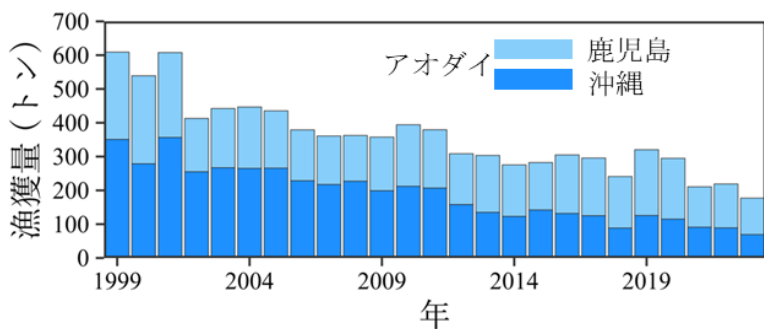


図9. アオダイの漁獲量

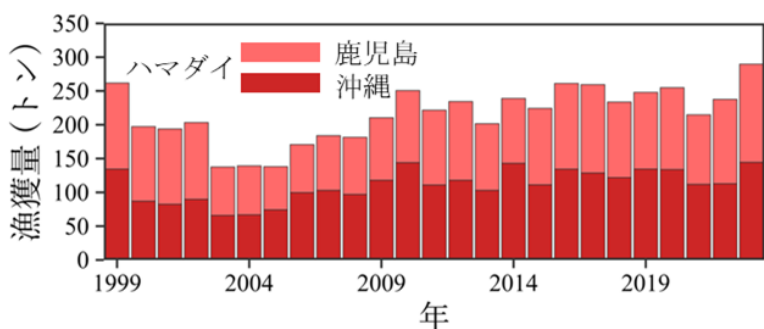


図10. ハマダイの漁獲量

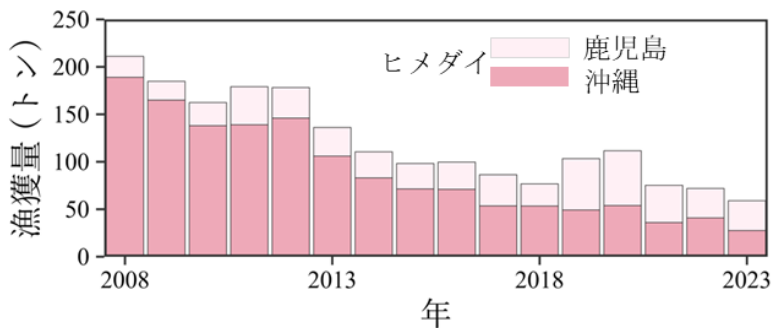


図11. ヒメダイの漁獲量

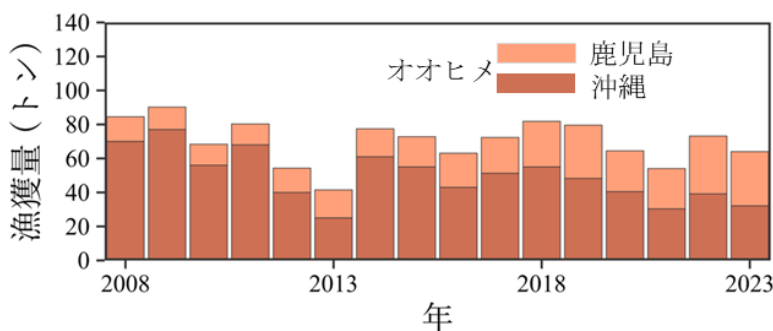


図12. オオヒメの漁獲量

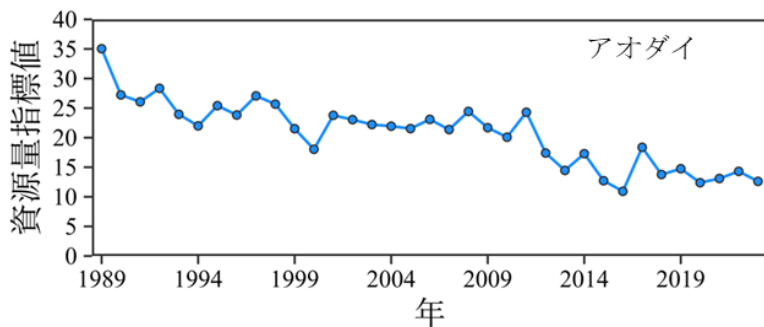


図 13. アオダイの資源量指標値

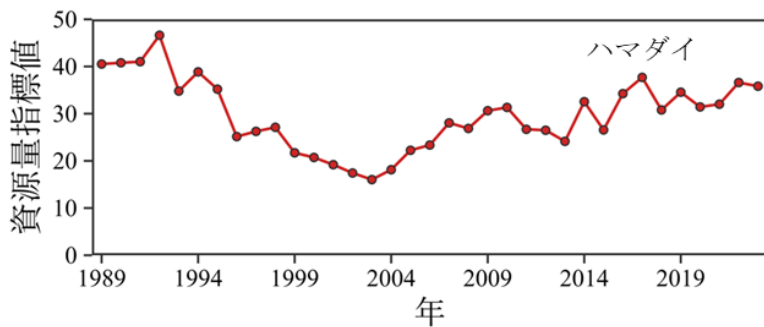


図 14. ハマダイの資源量指標値

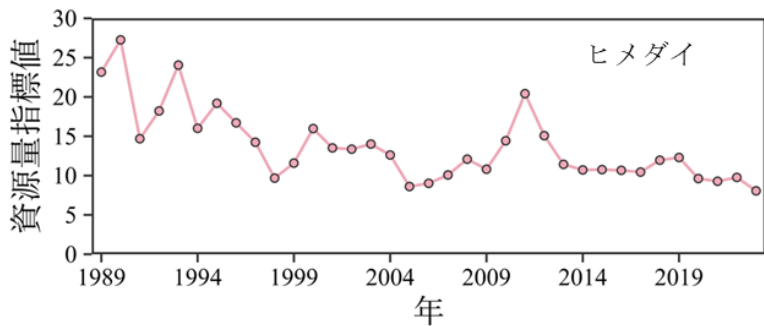


図 15. ヒメダイの資源量指標値

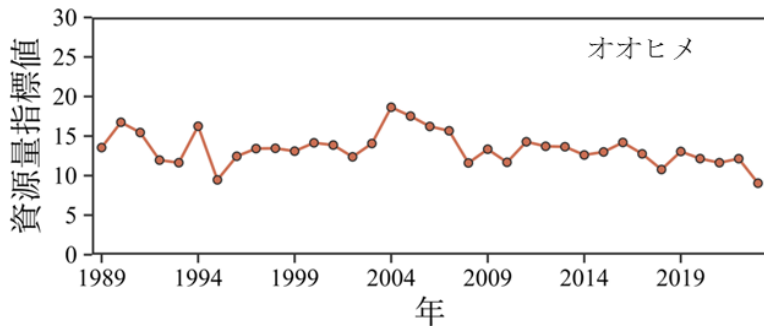


図 16. オオヒメの資源量指標値

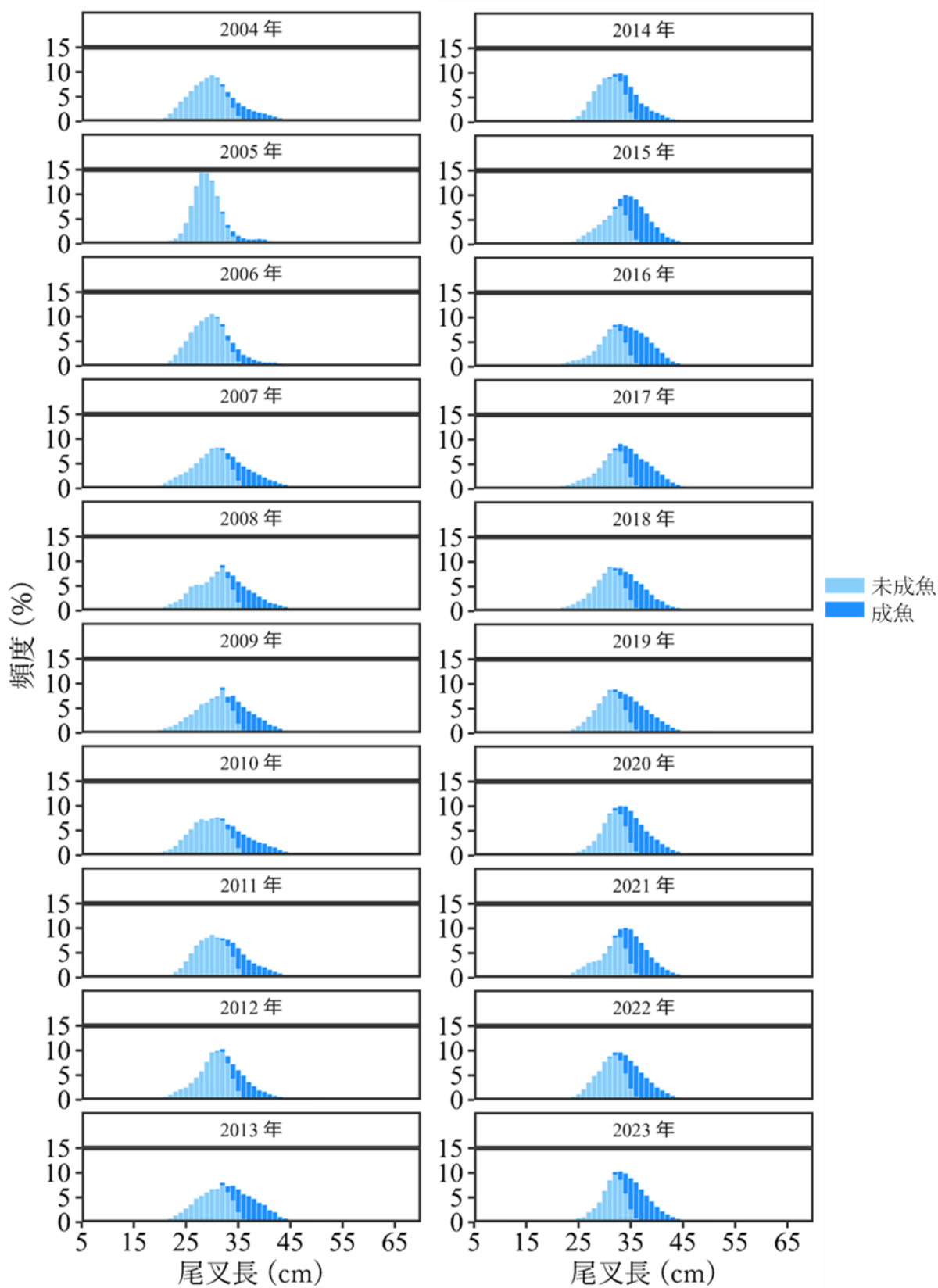


図 17. 2004～2023 年の漁獲物と成熟率曲線に基づくアオダイの尾叉長組成

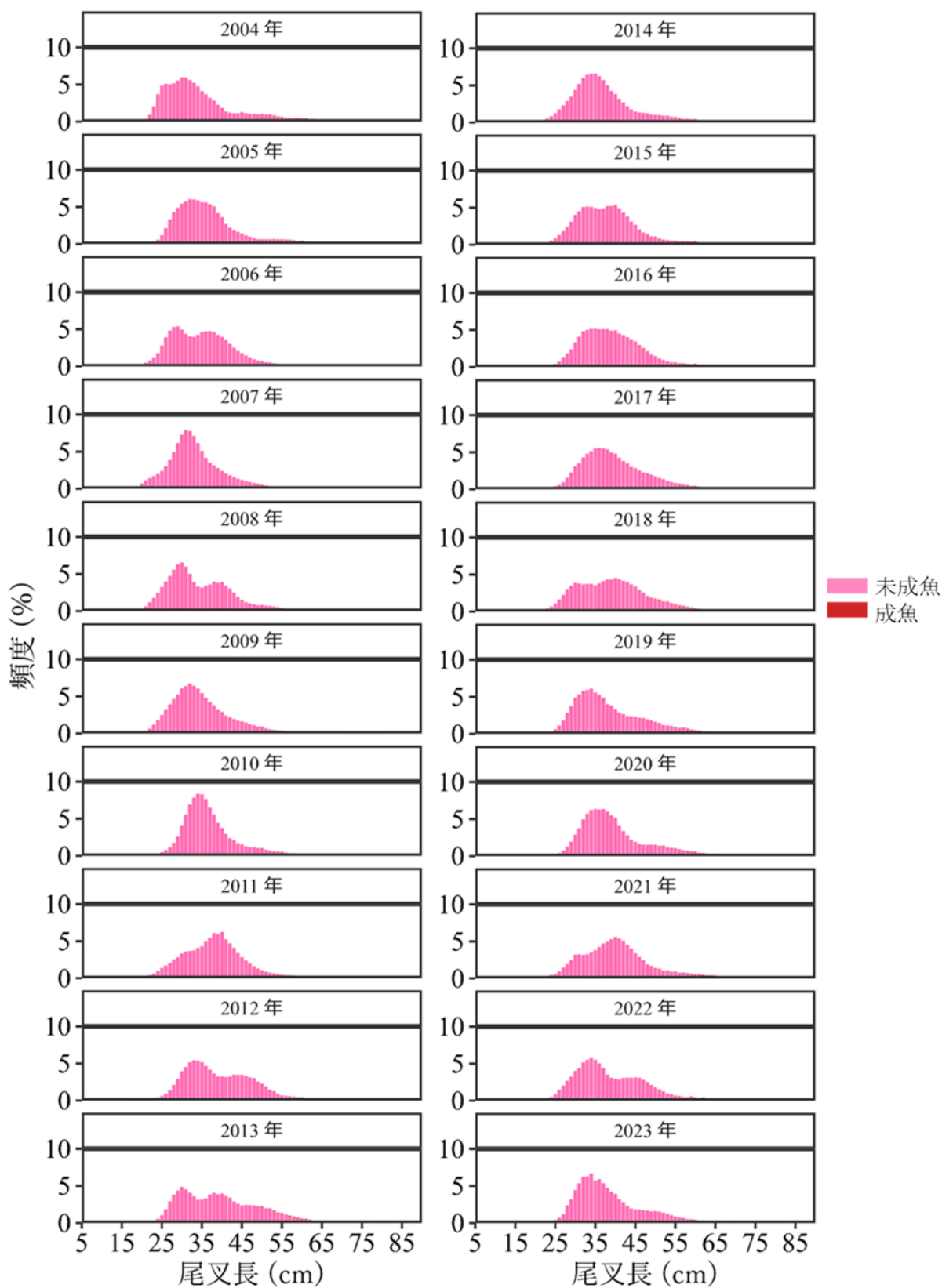


図 18. 2004～2023 年の漁獲物と成熟率曲線に基づくハマダイの尾叉長組成

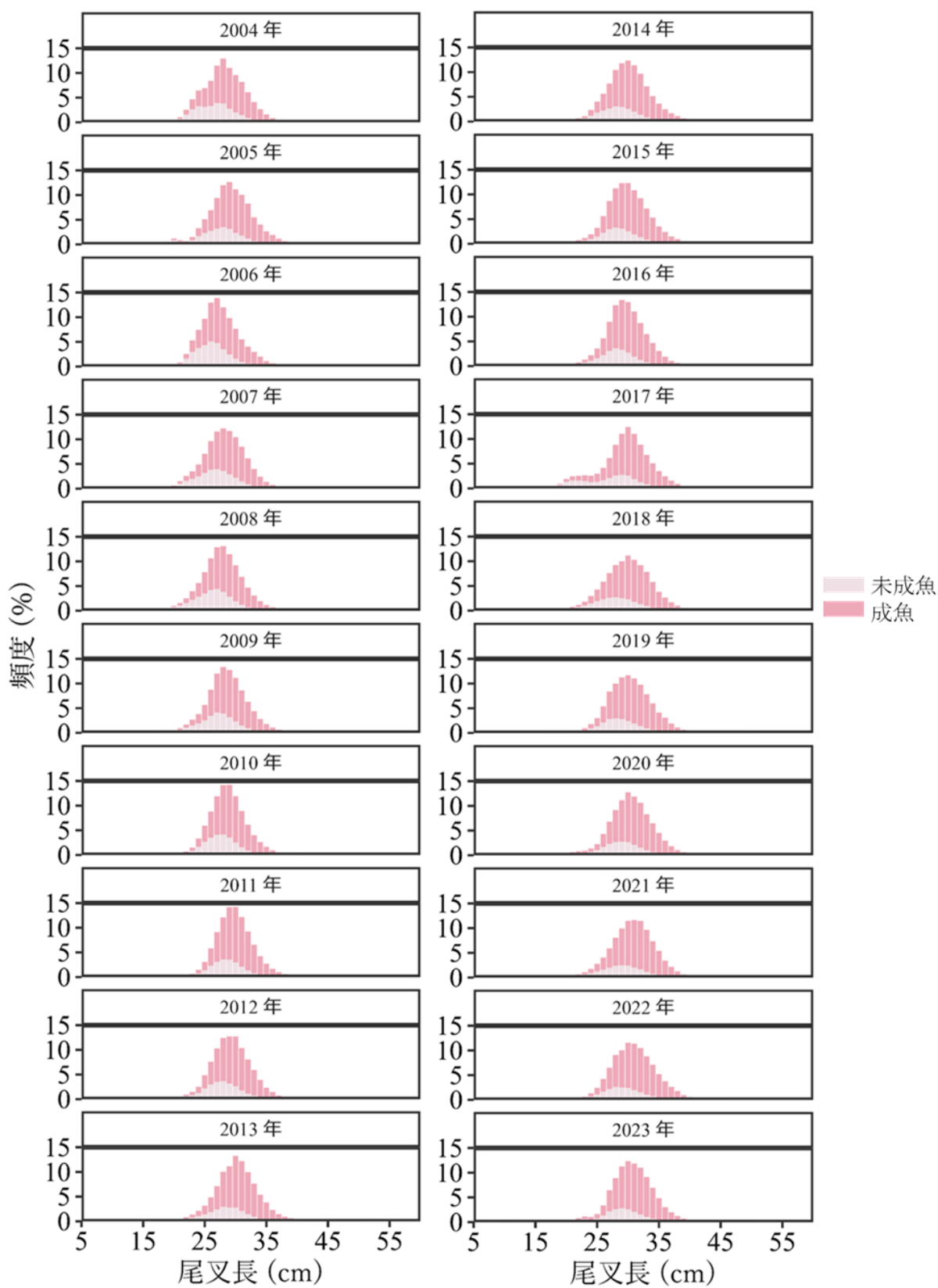


図 19. 2004～2023 年の漁獲物と成熟率曲線に基づくヒメダイの尾叉長組成

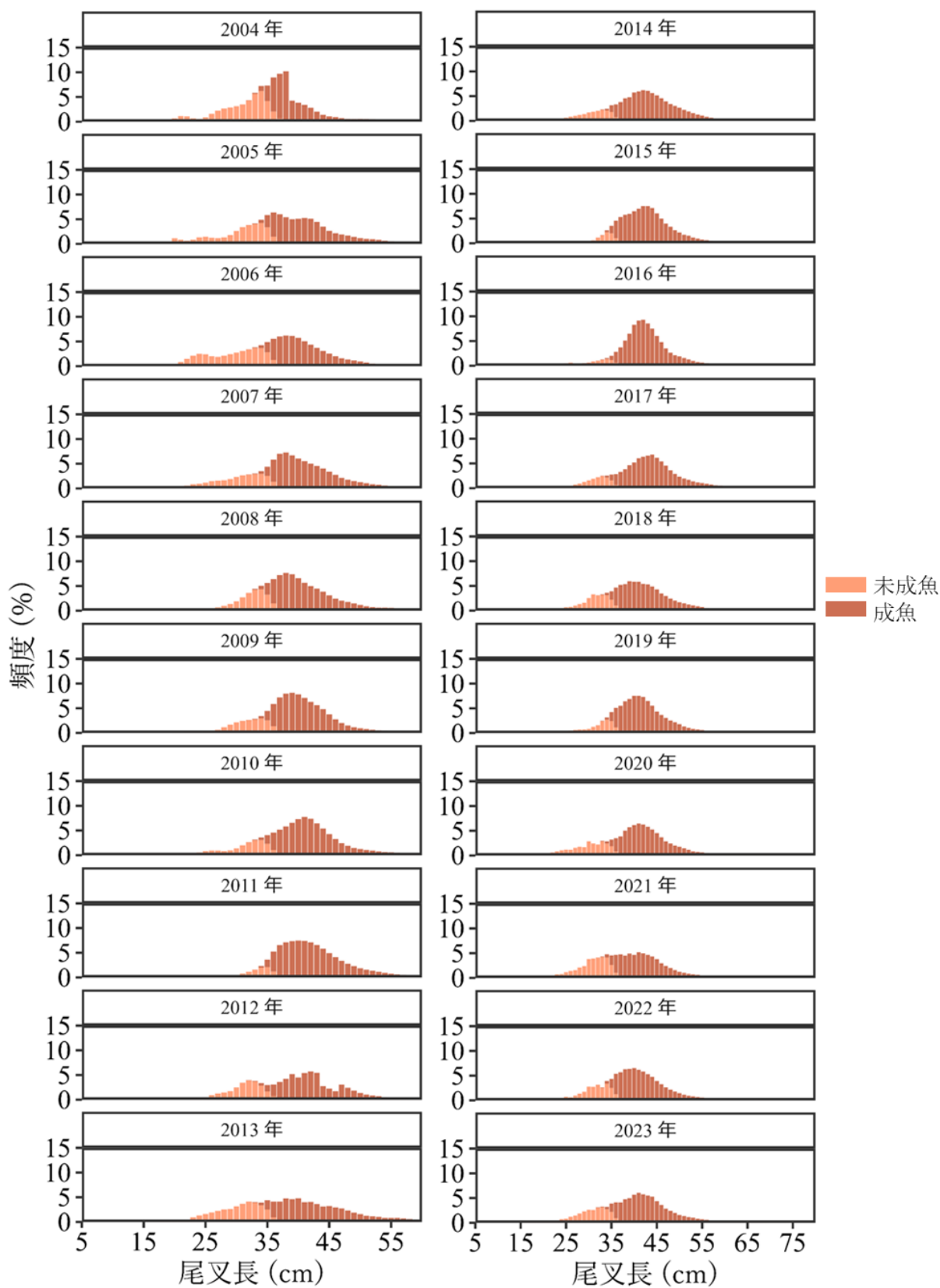


図 20. 2004～2023 年の漁獲物と成熟率曲線に基づくオオヒメの尾叉長組成

表 1. 鹿児島市中央卸売市場における 1960～2023 年のマチ類水揚げ量 (トン)

年	アオダイ	ハマダイ	ヒメダイ+オオヒメ	ヒメダイ	オオヒメ	合計
1960	372	356	113			841
1961	283	417	98			798
1962	225	363	114			702
1963	164	480	107			751
1964	292	360	57			709
1965	280	244	85			609
1966	357	276	104			737
1967	258	348	52			658
1968	239	452	69			760
1969	685	324	136			1,145
1970	476	391	168			1,035
1971	355	300	93			748
1972	300	336	84			720
1973	343	263	75			681
1974	248	309	64			621
1975	685	249	98			1,032
1976	456	341	70			867
1977	448	274	101			823
1978	542	311	122			975
1979	621	326	145			1,091
1980	589	309	110			1,008
1981	396	283	108			787
1982	387	191	126			704
1983	528	217	112			857
1984	411	185	125			721
1985	340	154	174			668
1986	457	186	176			818
1987	518	225	159			902
1988	453	228	152			832
1989	329	171	94			594
1990	299	153		61	23	536
1991	262	150		51	20	483
1992	237	136		46	11	430
1993	163	107		47	17	334
1994	148	117		31	28	323
1995	174	101		32	53	360
1996	198	143		31	35	408
1997	163	109		26	36	334
1998	169	139		12	45	365
1999	152	98		11	21	281
2000	155	83		13	24	275
2001	139	76		16	22	253
2002	95	83		9	18	204
2003	102	43		23	6	174
2004	114	43		20	5	182
2005	97	35		26	5	163

表 1. (続き)

年	アオダイ	ハマダイ	ヒメダイ+オオヒメ	ヒメダイ	オオヒメ	合計
2006	83	44		14	4	146
2007	80	44		9	4	136
2008	73	44		6	5	127
2009	69	46		4	3	123
2010	92	53		5	4	153
2011	92	54		6	4	157
2012	83	55		9	7	154
2013	96	48		10	7	161
2014	63	48		5	6	122
2015	65	61		8	8	142
2016	90	67		9	9	175
2017	84	64		12	9	169
2018	73	57		7	11	148
2019	93	54		22	13	183
2020	97	60		25	12	194
2021	69	47		15	10	141
2022	84	60		12	15	171
2023	65	72		11	12	161

表 2. 沖縄県におけるマチ類全体（主要 4 種以外も含む）の漁獲量（トン）、一本釣り経営体数（深海一本釣り以外も含む）およびマチ類主要 4 種の漁獲量（トン）

年	マチ類全体重量	経営体	アオダイ	ハマダイ	ヒメダイ	オオヒメ
1965	1,488					
1966	1,233					
1967	1,463					
1968	1,167					
1969	1,349					
1970	1,320					
1971	1,253					
1972	1,270					
1973	1,178					
1974	1,391	1,151				
1975	1,365	1,250				
1976	1,423	1,233				
1977	1,542	1,203				
1978	1,825	1,112				
1979	2,046	1,351				
1980	2,308	1,340				
1981	2,229	1,355				
1982	2,067	1,390				
1983	1,564	1,415				
1984	1,226	1,262				
1985	1,065	1,422				
1986	1,188	1,522				
1987	1,362	1,566				
1988	1,218	1,655				
1989	1,100	1,456	328	185	300	93
1990	977	1,443	311	174	270	86
1991	904	1,430	310	184	261	85
1992	969	1,417	386	195	263	84
1993	659	1,097	349	165	238	77
1994	661	1,138	379	189	208	72
1995	665	1,238	433	188	211	91
1996	683	1,334	415	215	254	83
1997	634	1,315	401	155	207	78
1998	535	1,168	387	159	203	82
1999	495	1,284	351	134	162	70
2000	421	1,234	279	87	172	80
2001	551	1,234	357	82	162	80
2002	279	835	255	90	188	81
2003	251	769	267	66	190	62
2004	212	842	265	67	159	57
2005	241	781	266	74	177	75
2006	238	753	228	100	145	59
2007			217	103	167	67
2008			227	97	189	70
2009			199	118	165	77
2010			212	144	138	56
2011			207	111	139	68
2012			158	118	146	40
2013			135	103	106	25
2014			123	143	83	61
2015			142	111	71	55
2016			132	134	71	43
2017			125	129	54	51
2018			89	122	53	55
2019			126	135	49	48
2020			115	134	54	40
2021			91	112	36	30
2022			89	113	41	39
2023			69	144	28	32

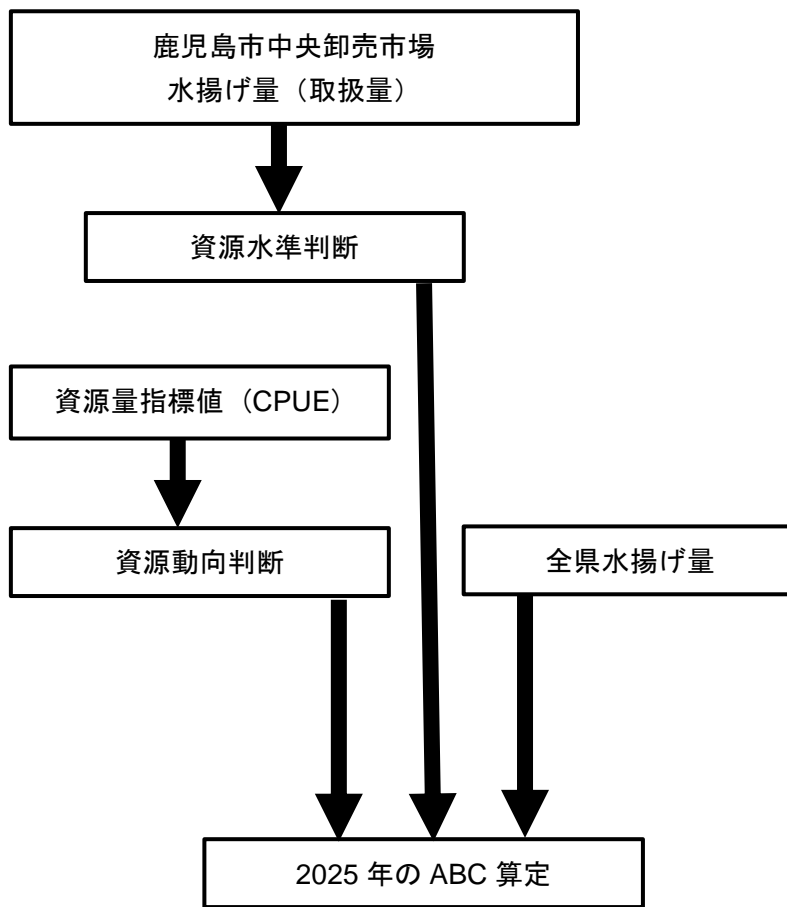
表3. 鹿児島県と沖縄県におけるマチ類4種の漁獲量(トン)

年	アオダイ			ハマダイ			ヒメダイ+ オオヒメ	ヒメダイ			オオヒメ		
	鹿児島	沖縄	合計	鹿児島	沖縄	合計	鹿児島	鹿児島	沖縄	合計	鹿児島	沖縄	合計
1999	258	351	609	127	134	262	75						70
2000	260	279	539	110	87	197	104						80
2001	251	357	608	111	82	194	93						80
2002	158	255	413	113	90	203	60						81
2003	175	267	442	72	66	138	87						62
2004	182	265	447	72	67	139	63						57
2005	170	266	435	64	74	138	83						75
2006	151	228	379	71	100	171	55						59
2007	144	217	361	81	103	184	62						67
2008	136	227	363	85	97	182		22	189	211	15	70	85
2009	159	199	358	92	118	210		20	165	185	13	77	90
2010	182	212	394	107	144	251		24	138	162	12	56	68
2011	172	207	379	111	111	222		40	139	179	12	68	80
2012	150	158	308	116	118	234		32	146	178	14	40	54
2013	168	135	303	99	103	202		30	106	136	17	25	42
2014	152	123	275	96	143	239		27	83	110	16	61	77
2015	140	142	282	113	111	224		27	71	98	18	55	73
2016	173	132	305	127	134	261		29	71	100	20	43	63
2017	171	125	296	131	129	259		33	54	86	21	51	72
2018	153	89	241	112	122	234		23	53	77	27	55	82
2019	195	126	320	113	135	248		54	49	103	31	48	80
2020	180	115	295	121	134	255		58	54	112	24	40	64
2021	120	91	211	103	112	215		39	36	75	24	30	54
2022	130	89	219	125	113	238		31	41	72	31	39	73
2023	108	69	177	145	144	290		31	28	59	32	32	64

表 4. 八重山漁協所属船によるマチ類 4 種の漁獲量 (トン)・航海数および CPUE (kg/航海)

年	アオダイ			ハマダイ			ヒメダイ			オオヒメ		
	漁獲量	航海数	CPUE	漁獲量	航海数	CPUE	漁獲量	航海数	CPUE	漁獲量	航海数	CPUE
1989	42.5	1,214	35.0	68.9	1,701	40.5	21.8	942	23.2	23.2	435	13.5
1990	30.8	1,132	27.2	64.8	1,588	40.8	24.3	893	27.3	27.3	565	16.7
1991	29.3	1,123	26.1	54.1	1,319	41.0	9.6	656	14.7	14.7	469	15.5
1992	24.4	860	28.3	57.3	1,230	46.6	10.0	548	18.2	18.2	373	12.0
1993	23.9	998	24.0	44.4	1,276	34.8	17.0	707	24.1	24.1	333	11.6
1994	24.8	1,127	22.0	58.4	1,502	38.9	12.6	787	16.0	16.0	433	16.2
1995	33.8	1,332	25.4	60.1	1,706	35.2	19.0	989	19.2	19.2	421	9.5
1996	34.9	1,465	23.8	60.5	2,407	25.1	20.3	1,215	16.7	16.7	479	12.5
1997	31.3	1,158	27.1	48.9	1,862	26.3	11.7	821	14.2	14.2	475	13.4
1998	29.7	1,158	25.7	45.5	1,679	27.1	8.2	844	9.7	9.7	449	13.5
1999	22.4	1,042	21.5	41.8	1,925	21.7	8.9	764	11.6	11.6	467	13.1
2000	15.5	861	18.0	27.7	1,337	20.7	11.6	725	16.0	16.0	557	14.2
2001	26.2	1,103	23.8	32.2	1,677	19.2	12.4	914	13.5	13.5	472	13.9
2002	20.2	878	23.1	26.6	1,524	17.4	9.5	713	13.4	13.4	428	12.4
2003	22.5	1,012	22.2	21.5	1,344	16.0	10.3	735	14.0	14.0	351	14.1
2004	14.8	674	21.9	23.7	1,308	18.1	7.8	619	12.6	12.6	344	18.6
2005	9.7	449	21.5	26.4	1,189	22.2	4.3	496	8.6	8.6	262	17.5
2006	13.6	589	23.1	32.8	1,404	23.4	6.0	662	9.0	9.0	280	16.2
2007	11.1	519	21.4	38.4	1,367	28.1	6.2	611	10.1	10.1	284	15.7
2008	14.2	579	24.4	35.8	1,332	26.9	8.9	733	12.1	12.1	401	11.6
2009	12.5	577	21.7	48.7	1,590	30.6	8.5	790	10.8	10.8	350	13.3
2010	11.8	579	20.3	52.2	1,665	31.3	12.6	876	14.4	14.4	205	11.7
2011	17.4	713	24.4	41.9	1,569	26.7	20.3	993	20.4	20.4	253	14.3
2012	9.0	517	17.4	39.4	1,486	26.5	12.4	824	15.1	15.1	253	13.7
2013	5.0	348	14.5	29.5	1,222	24.1	6.5	570	11.4	11.4	253	13.7
2014	5.4	311	17.3	41.5	1,275	32.5	6.1	569	10.7	10.7	220	12.6
2015	3.7	290	12.7	28.5	1,072	26.6	4.8	447	10.8	10.8	193	13.0
2016	2.3	211	10.9	37.4	1,091	34.3	4.5	421	10.7	10.7	138	14.2
2017	5.5	298	18.4	38.8	1,028	37.7	4.9	467	10.5	10.5	116	12.8
2018	5.0	360	13.8	37.1	1,205	30.8	6.5	547	12.0	12.0	184	10.8
2019	6.2	420	14.8	45.1	1,306	34.6	6.9	562	12.3	12.3	216	13.1
2020	4.2	336	12.4	42.8	1,361	31.4	4.8	500	9.6	9.6	131	12.2
2021	3.6	278	13.1	37.2	1,163	32.0	3.9	421	9.3	9.3	122	11.6
2022	4.3	297	14.3	41.0	1,119	36.6	4.6	473	9.8	9.8	138	12.1
2023	3.5	281	12.6	56.6	1,581	35.8	4.5	552	8.1	8.1	186	9.0

補足資料 1 資源評価の流れ



※ABC は漁業法改正前の考え方に基づく基本規則を適用した値